

編集室紀行

第5回 日本フォレンジック看護学会

「現代社会におけるフォレンジック看護の役割」開催

2018年9月1日(土)2日(日)、新潟日報メディアシップにて、第5回日本フォレンジック看護学会が開催されました。

「フォレンジック看護」とは、暴力と虐待の被害者と加害者への特別なケアを指し、1992年に国際フォレンジック看護協会(IAFN)が設立され、暴力の根絶、実態の把握と予防、多様な被害者支援、専門職者の教育等および実践活動支援が行われています。

今回の大会長は、新潟刑務所にて法務技官看護師を長く務められていた船山健二先生(現：一般財団法人聖マリアンナ会東横恵愛病院)。非常に若く、学会長としてエネルギーに満ちており、本学会へも熱量をこめられていました。



次回大会長 三隅順子先生と船山健二先生

大会長講演「受刑者の看護からみた被害・加害・社会」では、受刑者の看護に長く従事されていた経験から、ご自身の刑務所のイメージの変遷を語られました。それは、刑務所とは犯罪者を社会から隔離する場所、というものから、地域社会から排除された、社会的弱者のシェルターとしての姿でした。その後、生活保護や認知症についてのさまざまなデータにもとづいて、受刑者への無知による偏見、つまり加害者=悪=排除すべきもの、という理解がいかに浅いものか、ていねいに解説されました。そして人が人をケアすることのキーワードに「関心」「寛容」を挙げられていました。社会的弱者への無関心、不寛容が広がる現代社会において、まさしくフォレンジック看護が果たす役割の1つを象徴しているように感じました。

基調講演では、東京慈恵会医科大学医学部看護学科の佐藤紀子先生が「フォレンジック看護を創造する看護職生涯発達学の視点から」と題し、ご自身が中心になってつくりあげら

れた看護職生涯発達学と、これから発展していくであろうフォレンジック看護とのつながりについて講演されました。どちらも、患者や受刑者と医療者との出会いの場において、事例を語ることで得られる知に着目しているところに、共通点を見られたようで

す。佐藤先生は、事前に船山先生から送られたフォレンジック看護の、暴力被害などの事例に強く示唆を受けたようで、学会終了後、学会員にもなられたそうです。

また特別講演として、原宿カウンセリングセンター信田さよ子先生が、DV被害者のグループカウンセリング、DV加害者プログラムを長く実施されてきた経験から、「加害者臨床と被害者支援」についてお話をしました。ちょうど札幌で妊娠した妻を夫が撲殺した事件があった直後でもあり、警察や社会の情勢、そしてその問題をリアルな視点で語られました。加害者プログラムはケアではなく、あくまで更生の支援であることを強調されていました。船山先生の本張と矛盾するようですが、それは指されている「加害者」の領域が異なるためでしょう。それぞれの現場での加害/被害をめぐる問題が浮き彫りになっていました。

他の講演も、熱量に溢れ、また社会と深く結びついた取り組みばかり。法務関係の出席者が多かったことも、看護系の学会としては非常に特徴的でした。

次回大会は2019年8月31日(土)、9月1日(日)「SANE／支援者に必要な知」のテーマ(大会長：三隅順子先生 東京医科歯科大学)です。暴力・性の問題などにご関心のある方、またそうでない方でも、看護の新たな可能性を感じるこの学会に、ぜひご参加ください。

(本誌編集室)